

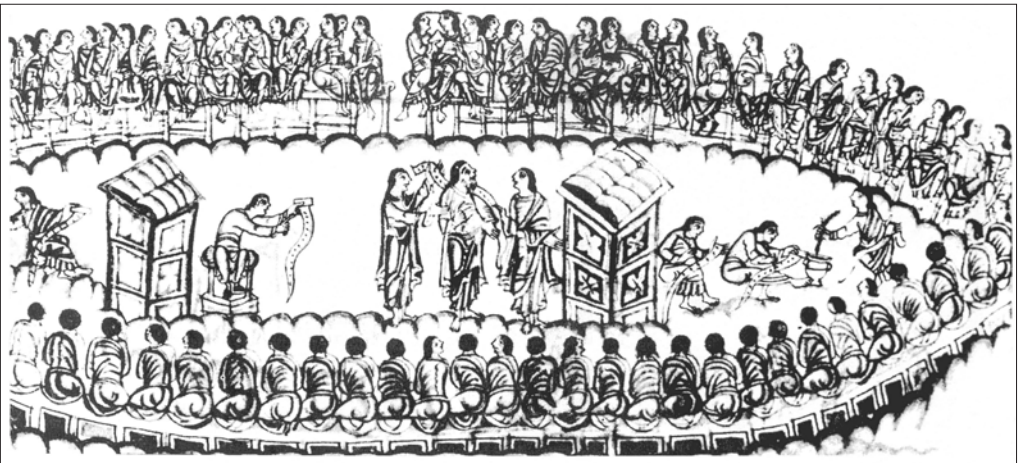
# 日本中世英語英文学会 第33回全国大会

プログラム・発表要旨

時：2017年12月2日(土)・3日(日)

所：立教大学（池袋キャンパス）

The 33rd Congress  
The Japan Society for Medieval English Studies  
2-3 December 2017  
Rikkyo University (Ikebukuro Campus)



日本中世英語英文学会

## 目 次

会長挨拶	3
会場案内	4
最寄駅（池袋駅）までのアクセス	5
最寄駅から会場までのアクセス	6
立教大学（池袋キャンパス）詳細図	7
会場見取り図	8
プログラム 第1日 12月2日（土）	10
第2日 12月3日（日）	12
Programme Saturday 2 December	14
Sunday 3 December	16
発表要旨 第1日 12月2日（土） 研究発表Ⅰ	18
研究発表Ⅱ	20
研究発表Ⅲ	22
第2日 12月3日（日） 企画シンポジウム	24
研究発表Ⅳ	26
研究発表Ⅴ	28

11月13日(月) [必着] までに、学会 HP 経由 (推奨)、  
あるいは同封の葉書でご出欠をお知らせ下さい。

\* 出張証明書が必要な方は、その旨をご記入下さい。

### 大会準備委員

三浦あゆみ（委員長） 狩野晃一（副委員長）  
堀口和久 和治元義博 福田一貴 工藤義信 林邦彦

### 開催校委員

菊池清明 岡本広毅

### 事務局

〒739-8522 東広島市鏡山1-2-3  
広島大学大学院文学研究科 大野英志研究室内  
Tel. 082-424-6678 Email: jsmes2017@gmail.com

## 会長挨拶

会員の皆様

仲秋の候、会員の皆様には、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。すでにご案内させていただいていますように、お陰様で、日本中世英語英文学会第33回全国大会を、来る12月2日（土）、3日（日）の両日、立教大学にて開催する運びとなりました。ここに大会のプログラムをお送りします。会員の皆様がふるってご参加くださいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本年度の大会も、数多くの研究発表に加えて、企画シンポジウムも予定されており、両日とも昨年度の大会に劣らず充実した内容になっています。このようなプログラムを企画し準備していただいた大会準備委員会に感謝します。お一人でも多くの会員の皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

2017年10月吉日

日本中世英語英文学会  
会長 地村 彰之

## 会場案内

1. 受付は、12月2日(土) 11:30-16:00および3日(日) 9:30-11:30に、7号館1階7102教室前で行われます。
2. 当日会員会費は、一般1,000円、学生・定年退職者500円です。
3. ハンドアウトは、各発表会場で配布します。
4. 大会本部は、7号館2階7251教室です。
5. 会員控室は、10号館1階 X106教室です。12月2日(土) の13:00頃からご利用いただけます。
6. 司会者・発表者控室は、10号館1階 X107教室です。12月2日(土) の13:00頃からご利用いただけます。
7. 書店展示は、7号館1階7102教室前で行われます。
8. ポスターセッションは、12月2日(土) 12:00-13:00および3日(日) 9:00-10:00に、7号館1階7155~7157教室で行われます。
9. 懇親会は、12月2日(土) 18:30からキャンパス内の第一食堂で行われます。会費(一般5,000円、学生3,000円)は、当日受付でお支払い下さい。
10. 車による会場への入場はできません。また、キャンパス内は指定喫煙場所を除いてすべて禁煙です。
11. 学内の食堂は、日曜日の営業はしていませんが、池袋駅周辺には食事のできる店があります。
12. 当学会では宿泊施設の斡旋は行っていません。

## 連絡先

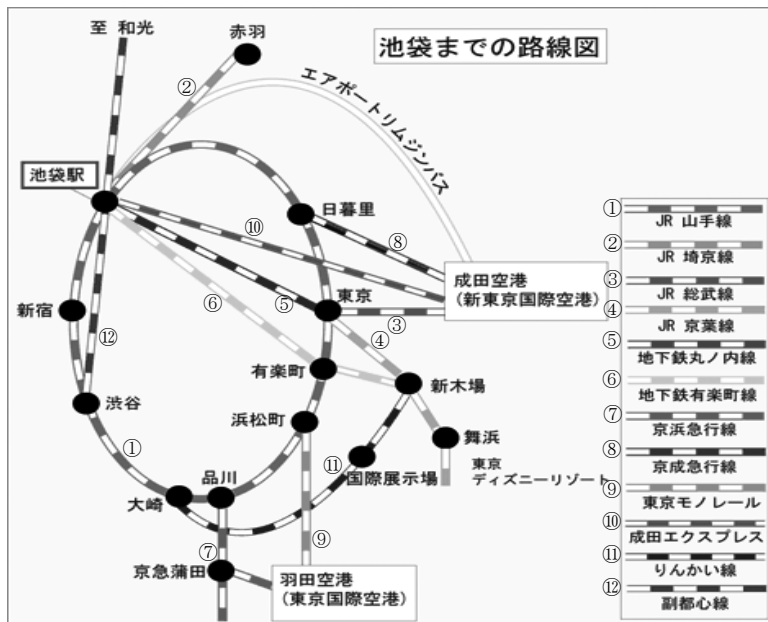
立教大学(池袋キャンパス)

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

(大会本部：7号館2階7251教室)

開催校連絡先：菊池清明研究室 03-3985-2470

## 最寄駅（池袋駅）までのアクセス



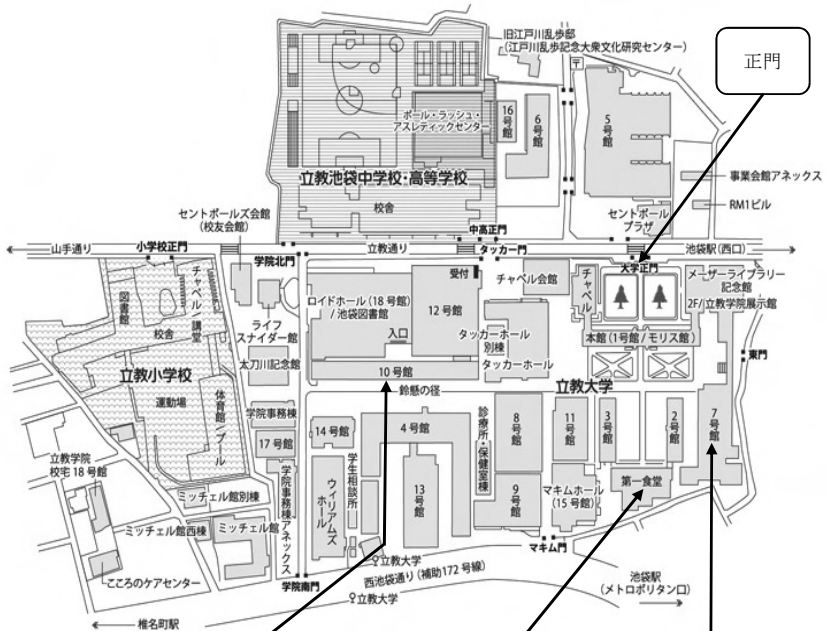
- ・ 東京駅から地下鉄丸ノ内線で約17分（池袋駅が終点）
- ・ 品川駅からJR山手線（外回り）で約30分（大崎駅から埼京線に乗り換えると約20分）
- ・ 新宿駅からJR山手線（外回り）で約10分、または埼京線で約6分
- ・ 大宮駅からJR埼京線快速・通勤快速で約25分
- ・ 羽田空港から東京モノレールで浜松町駅を經由し、JR山手線（内回り）で延べ約1時間

## 最寄駅から会場までのアクセス



- ・池袋駅 (JR 各線・東武東上線・西武池袋線・地下鉄東京メトロ丸ノ内線／有楽町線／副都心線) 西口より大学正門まで徒歩約7分
- ・要町駅 (地下鉄東京メトロ有楽町線／副都心線) 6番出口より大学正門まで徒歩約6分

# 立教大学（池袋キャンパス）詳細図



**【10号館】**  
 研究発表会場，  
 会員控室，司会者・発表者控室  
 (※10号館の各教室は  
 12月2日 [土] の13時頃から利用可)

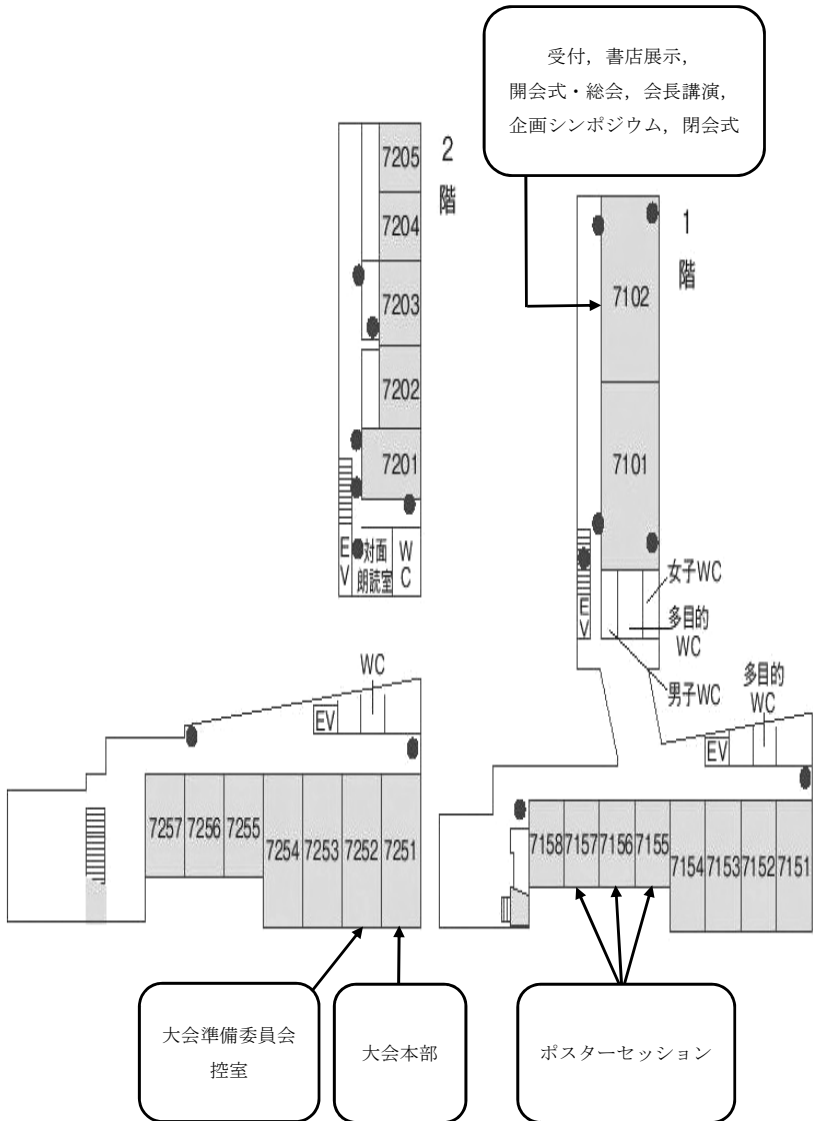
**【第一食堂】**  
 懇親会会場

**【7号館】**  
 大会本部，受付，  
 書展览展示，  
 ポスターセッション，  
 開会式・総会，  
 会長講演，  
 企画シンポジウム，  
 閉会式

編集委員会 (12月1日[金]) : ロイドホール (18号館) 第2会議室  
 評議員会 (12月2日[土]) : 14号館 D603  
 研究助成セミナー : 本館1203 (12月1日[金])  
 7号館7151~7154 (12月2日[土]・3日[日])

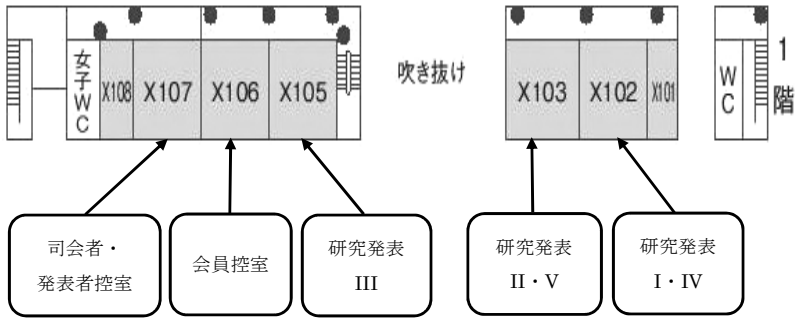
# 会場見取り図

## 7号館





# 10号館



※大学の教室運営と準備の関係上、10号館の各教室は12月2日(土)の13時頃から利用可となります。

# 日本中世英語英文学会 第33回全国大会プログラム

2017年12月2日(土)・3日(日)

立教大学 (池袋キャンパス)

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

(大会本部：7号館2階7251教室)

開催校連絡先：菊池清明研究室 03-3985-2470

## 第1日 12月2日(土)

11:30-16:00 受付 (7号館1階7102教室前)

\* 会員控室 (10号館1階 X106教室) 【13:00頃から利用可】

12:00-13:00 ポスターセッション (7号館1階7155～7157教室)

13:00-13:30 開会式・総会 (7号館1階7102教室)

	司会	白井菜穂子 (文化学園大学)
開会の言葉	会長	地村彰之 (岡山理科大学)
開催校挨拶	立教大学文学部長	丸山浩明
議事		
事務局報告	事務局長	大野英志 (広島大学)
編集委員会報告	編集委員長	唐澤一友 (駒澤大学)
大会準備委員会報告	大会準備委員長	三浦あゆみ (大阪大学)
大会案内	開催校委員	岡本広毅 (立命館大学)

13:40-14:40 会長講演 (7号館1階7102教室)

司会 松田隆美 (慶應義塾大学)

チヨーサーの館再考

会長 地村彰之 (岡山理科大学)

15:00-18:10 研究発表 I (10号館1階 X102教室)

15:00-15:40 司会 不破有理 (慶應義塾大学)

1. *Sir Gawain and the Green Knight* における語りの枠組みとその意味  
濱田里美 (立教大学大学院)

- 15:50-16:30 司会 不破有理 (慶應義塾大学)
2. Knighthood of Sir Gawain and the Lord Bertilak  
— *Sir Gawain and the Green Knight* における「自己」と「評価」—  
玉川明日美 (立教大学大学院)
- 16:40-17:20 司会 小路邦子 (慶應義塾大学非常勤講師)
3. 中英語騎士物語における馬の役割に関する一考察  
貝塚泰幸 (千葉商科大学他非常勤講師)
- 17:30-18:10 司会 小路邦子 (慶應義塾大学非常勤講師)
4. 王が二人いる国：マロリーの『アーサー王の死』における地名と字名  
小宮真樹子 (近畿大学)
- 15:00-17:20 研究発表Ⅱ (10号館1階 X103教室)
- 15:00-15:40 司会 小塚良孝 (愛知教育大学)
5. 古英語から初期中英語における語順：動詞の意味・統語的特性から  
高橋佑宜 (京都大学大学院・日本  
学術振興会特別研究員)
- 15:50-16:30 司会 小塚良孝 (愛知教育大学)
6. 古英語版『オロシウス』における主節の動詞文末語順の考察  
小林茂之 (聖学院大学)
- 16:40-17:20 司会 小池剛史 (大東文化大学)
7. 古英語 *hātan* とその関連表現  
海田皓介 (千葉大学非常勤講師)
- 15:00-17:20 研究発表Ⅲ (10号館1階 X105教室)
- 15:00-15:40 司会 網代敦 (大東文化大学)
8. 古英語 *Andreas* における街の風景  
衛藤安治 (福島大学非常勤講師)
- 15:50-16:30 司会 中尾佳行 (福山大学)
9. John Lydgate の聖母関連詩と aureate style の同時代受容をめぐって  
新居達也 (慶應義塾大学大学院・  
日本学術振興会特別研究員)
- 16:40-17:20 司会 米村泰明 (埼玉学園大学)
10. ヨーク・サイクルにおけるイエスの裁判  
— ピラトとヘロデによる「中世の」法廷 —  
末松良道 (元武蔵野大学教授)
- 18:30-20:00 懇親会 (第一食堂)

## 第2日 12月3日(日)

9:00-10:00 ポスターセッション (7号館1階7155～7157教室)

9:30-11:30 受付 (7号館1階7102教室前)

\* 会員控室 (10号館1階 X106教室)

10:00-13:00 企画シンポジウム (7号館1階7102教室)

The Art of Reading Slowly — 中世英語テキストを精読する

司会 寺澤盾 (東京大学)

10:10-10:40

- I. 十字架はキリストを殺したのか — *The Dream of the Rood* 66a 再考  
寺澤盾 (東京大学)

10:40-11:10

- II. 校訂本作成を支えるフィロロジ—  
— 古英詩 *Menologium* と *Maxims I* の場合  
唐澤一友 (駒澤大学)

11:20-11:50

- III. 精読から引き出される中英語の言語的特徴  
三浦あゆみ (大阪大学)

11:50-12:20

- IV. *The Canterbury Tales: General Prologue*, line 521と *Piers Plowman B. V.*  
187の解釈をめぐって 田島松二 (九州大学名誉教授)

10:00-12:20 研究発表IV (10号館1階 X102教室)

10:00-10:40 司会 石黒太郎 (明治大学)

11. 中世イングランドの百科事典と編纂者たち  
— アレクサンダー・ネッカムとバルトロマエウス・アングリクスを中心に  
大沼由布 (同志社大学)

10:50-11:30 司会 岡本広毅 (立命館大学)

12. *Paris and Vienne: William Caxton's Romance or History?*  
Wanchen Tai (慶應義塾大学・  
一橋大学非常勤講師)

11:40-12:20 司会 都地沙央里 (福岡女子大学)

13. ウィリアム・キャクストンの印刷用手稿に見るテキスト改変  
高木眞佐子 (杏林大学)

10:00-12:20 **研究発表V** (10号館1階 X103教室)

10:00-10:40 **司会** 鎌田幸雄 (仙台大学)

14. 14世紀頭韻詩韻律研究の現況と展望 —『ガウエイン』詩人の作品を中心に—  
井上典子 (小樽商科大学)

10:50-11:30 **司会** 堀田隆一 (慶應義塾大学)

15. サミュエルズタイプIIの4つの文書  
松沢絵里 (大阪芸術大学)

11:40-12:20 **司会** 井口篤 (慶應義塾大学)

16. 中英語散文 *Gilte Legende* の言語的特徴  
池上恵子 (成城大学短期大学部名誉教授・  
前大東文化大学教授)

13:10-13:25 **閉会式** (7号館1階7102教室)

閉会の言葉

**副会長** 寺澤盾 (東京大学)

# PROGRAMME

SATURDAY 2 DECEMBER

**11:30-16:00 Registration** (Room 7102, 1F, Building No. 7)

\*Members' Tea Room (Room X106, 1F, Building No. 10)  
[open from about 13:00]

**12:00-13:00 Poster Session** (Rooms 7155 to 7157, 1F, Building No. 7)

**13:00-13:30 Plenary Session** (Room 7102, 1F, Building No. 7)

President: SHIRAI, Naoko, *Bunka Gakuen University*

Opening Address JIMURA, Akiyuki

President of JSMES, *Okayama University of Science*

Welcome Address MARUYAMA, Hiroaki

Dean of College of Arts, *Rikkyo University*

Business Announcements

**13:40-14:40 Inaugural Lecture** (Room 7102, 1F, Building No. 7)

President: MATSUDA, Takami, *Keio University*

A Reconsideration of Chaucer's House

JIMURA, Akiyuki, President of JSMES, *Okayama University of Science*

**15:00-18:10 Paper Session I** (Room X102, 1F, Building No. 10)

15:00-15:40 President: FUWA, Yuri, *Keio University*

1. The Narrative Frame and Its Meaning in *Sir Gawain and the Green Knight*

HAMADA, Satomi, *Graduate Student, Rikkyo University*

15:50-16:30 President: FUWA, Yuri, *Keio University*

2. Knighthood of Sir Gawain and the Lord Bertilak: Identity and 'prys' in

*Sir Gawain and the Green Knight*

TAMAKAWA, Asumi, *Graduate Student, Rikkyo University*

16:40-17:20 President: SHOJI, Kuniko, *Keio University*

3. Classifying Romances: Aspects of Interactions between Knights and Horses

KAITSUKA, Yasuyuki, *Chiba University of Commerce*

17:30–18:10 Presider: SHOJI, Kuniko, *Keio University*

4. The Land with Two Kings: Place Names and Bynames in Malory's *Morte Darthur*

KOMIYA, Makiko, *Kindai University*

**15:00–17:20 Paper Session II** (Room X103, 1F, Building No. 10)

15:00–15:40 Presider: KOZUKA, Yoshitaka, *Aichi University of Education*

5. Word Order from Old English to Early Middle English: From Semantic and Syntactic Categories of Verbs

TAKAHASHI, Yuki, *Graduate Student, Kyoto University*  
/ *JSPS Research Fellow*

15:50–16:30 Presider: KOZUKA, Yoshitaka, *Aichi University of Education*

6. Examination of the Verb-Final Word Order in Main Clauses in the Old English *Orosius*

KOBAYASHI, Shigeyuki, *Seigakuin University*

16:40–17:20 Presider: KOIKE, Takeshi, *Daito Bunka University*

7. Old English *hātan* and Its Related Expressions

KAITA, Kousuke, *Chiba University*

**15:00–17:20 Paper Session III** (Room X105, 1F, Building No. 10)

15:00–15:40 Presider: AJIRO, Atsushi, *Daito Bunka University*

8. Cityscape in the Old English *Andreas*

ETO, Yasuharu, *Fukushima University*

15:50–16:30 Presider: NAKAO, Yoshiyuki, *Fukuyama University*

9. The Contemporary Reception of John Lydgate's Marian Lyrics and the Aureate Style

NII, Tatsuya, *Graduate Student, Keio University*  
/ *JSPS Research Fellow*

16:40–17:20 Presider: YONEMURA, Yasuaki, *Saitama Gakuen University*

10. The 'Medieval' Law Courts of Pilate and Herod in the York Cycle

SUEMATSU, Yoshimichi, *Former Professor, Musashino University*

**18:30–20:00 Reception** (Main Dining Hall)

SUNDAY 3 DECEMBER

9:00-10:00 **Poster Session** (Rooms 7155 to 7157, 1F, Building No. 7)

9:30-11:30 **Registration** (Room 7102, 1F, Building No. 7)

\*Members' Tea Room (Room X106, 1F, Building No. 10)

10:00-13:00 **Special Symposium** (Room 7102, 1F, Building No. 7)

The Art of Reading Slowly

— A Philological Appreciation of Medieval English Texts

Presider: TERASAWA, Jun, *The University of Tokyo*

10:10-10:40

I. The Cross as a Slayer of Christ? *The Dream of the Rood* 66a Revisited

TERASAWA, Jun, *The University of Tokyo*

10:40-11:10

II. The Art of Reading Slowly Underlying Editions of Old English Poems

— Cases of the *Menologium* and *Maxims I*

KARASAWA, Kazutomo, *Komazawa University*

11:20-11:50

III. Some Linguistic Features Emerging from a Close Reading of Middle English Texts

MIURA, Ayumi, *Osaka University*

11:50-12:20

IV. Some Philological Notes on *The Canterbury Tales: General Prologue*, 521 and *Piers Plowman* B. V. 187

TAJIMA, Matsuji, *Professor Emeritus, Kyushu University*

10:00-12:20 **Paper Session IV** (Room X102, 1F, Building No. 10)

10:00-10:40 Presider: ISHIGURO, Taro, *Meiji University*

11. Encyclopaedias and Their Compilers in Medieval England: Alexander Neckam and Bartholomaeus Anglicus

ONUMA, Yu, *Doshisha University*



10:50-11:30 Presider: OKAMOTO, Hiroki, *Ritsumeikan University*

12. *Paris and Vienne*: William Caxton's Romance or History?

TAI, Wanchen, *Keio University / Hitotsubashi University*

11:40-12:20 Presider: TSUJI, Saori, *Fukuoka Women's University*

13. Altering the Text of the Printer's Copy at William Caxton's Print Shop

TAKAGI, Masako, *Kyorin University*

**10:00-12:20 Paper Session V** (Room X103, 1F, Building No. 10)

10:00-10:40 Presider: KAMATA, Yukio, *Sendai University*

14. Latest Findings and Prospects of the 14<sup>th</sup> Century Alliterative Verse  
Metre Studies: The Unrhymed Alliterative Long Lines in the Works of  
the *Gawain*-Poet

INOUE, Noriko, *Otaru University of Commerce*

10:50-11:30 Presider: HOTTA, Ryuichi, *Keio University*

15. Four Texts of Samuels Type II

MATSUZAWA, Eri, *Osaka University of Arts*

11:40-12:20 Presider: IGUCHI, Atsushi, *Keio University*

16. Linguistic Traits of the ME Prose *Gilte Legende*

IKEGAMI, Keiko, *Professor Emeritus, Junior College, Seijo University*  
/ *Former Professor, Daito Bunka University*

**13:10-13:25 Closing Address** (Room 7102, 1F, Building No. 7)

TERASAWA, Jun, Vice-President of JSMES, *The University of Tokyo*

# 発表要旨

第1日 12月2日(土)

15:00-18:10 研究発表 I (10号館1階 X102教室)

15:00-15:40 司会 不破有理 (慶應義塾大学)

## 1. *Sir Gawain and the Green Knight* における語りの枠組みとその意味

濱田里美 (立教大学大学院)

*Sir Gawain and the Green Knight* の構成は、ロマンスの“symmetrical structure”の伝統に準じており、その構成の巧みさは本作品の評価とも結びついている。しかし、Larry D. Benson が“unusually long”と指摘するように、不自然に長い冒頭部は、作品全体が優れた対称性を見せるが故に、逆説的にその不均衡さを露見させてしまう。

詩人は冒頭部で、この物語は当時の一般的慣習であった orality (もしくは aurality) に即していることを強調するが、その直後には writtenness にも言及する。しかし、結論部で述べられるのは textuality のみであり、最終的にこの物語を、書物という権威をともなう歴史の枠組みに位置づけようとする。本発表では、この冒頭部と結論部の非対称性を中心に、本作品を声と文字による物語の受容という観点から検証する。詩人が「語る／聴く」の伝統を借用しつつ、文字で後世に「書き残す」という文化に着目し、その重要性に十分に意識的であったことを示す。

15:50-16:30 司会 不破有理 (慶應義塾大学)

## 2. Knighthood of Sir Gawain and the Lord Bertilak — *Sir Gawain and the Green Knight* における「自己」と「評価」—

玉川明日美 (立教大学大学院)

*Sir Gawain and the Green Knight* において、Hautdesert 城で Gawain が経験する「交換ゲーム」や「誘惑」は、彼の騎士としての資質を問うための試練であり、Gawain のアイデンティティの形成における重要な場面である。その際、試練を仕組んだ城主の Bertilak 卿自身も一種の装置に過ぎず、また、「交換」する狩猟の獲物を通して Gawain を評価する一方的に優位な存在としてみ

なされてきた。しかし、「交換」という行為は、狩猟と宮廷におけるそれぞれの実力を互いに提示し、評価し合う、相対的な存在であることを示している。本発表では、従来、看過されがちだった Bertilak 卿自身の「個」にも着目し、Gawain と Bertilak 卿が狩猟と宮廷、それぞれの場で求められる「騎士」としての振る舞いについて、比較検討する。特に、両者が「交換」を行う際、相手から認められる自らの〈価値〉をいかにして提示しようとしているのか、語彙の使用や文体的な特徴から分析を行う。Gawain-Poet が作品を通して、社会における個人が自己形成を行う過程を描いた意義についても議論したい。

16:40-17:20 司会 小路邦子（慶應義塾大学非常勤講師）

### 3. 中英語騎士物語における馬の役割に関する一考察

貝塚泰幸（千葉商科大学他非常勤講師）

中世騎士物語には、アーサー王の騎士が主人公であろうとも、シャルルマーニュの武勲詩が題材になろうとも、異教徒征伐を描いていようとも、必ず馬が登場する。そして騎士たちは、騎乗する馬が命を落とした際に様々な態度を示す。馬の死に対して完全に無関心な騎士（*Amis and Amiloun, Libeaus Desconus*）がいる一方で、馬が敵対する騎士に殺された時に怒りをあらわにする騎士（*Sir Tryamour, Partonope of Blois*）もいる。また、愛馬の死に直面して、騎士は涙を流すことさえある（*Beues of Hamtoun, The Awntyrs off Arthure*）。本発表では、中世イングランドの騎士と馬とを取り巻く歴史と文化を考慮に入れながら、中英語騎士物語において、馬を失った際の騎士の態度が描かれる場面を分析して、それらの描写と描写を内包する作品の類型化を試みる。こうした分類学的な研究は、長く看過されてきた馬の文学作品における意義や役割の再評価につながるはずである。馬は騎士を定義づけるだけでなく、騎士の悲劇と武勇を語る作品そのものもまた定義づける。

17:30-18:10 司会 小路邦子（慶應義塾大学非常勤講師）

### 4. 王が二人いる国：マロリーの『アーサー王の死』における地名と字名

小宮真樹子（近畿大学）

本発表はトマス・マロリーの『アーサー王の死』における地名を、字名として用いられる場合に注目して考察する。マロリーは固有名詞に強い関心を示したが、時に地名と人名を混同している。またゴール（Gore）をバグデマガスト

ウリエンスの領地とし、ひとつの国に二人の王がいる奇妙な状況を生み出した。

出身地とアイデンティティが有機的に結びついていない例として、ゴール出身の騎士コルグレヴァンスも挙げられる。彼と同郷の人物の関係は作中で言及されず、出身地は騎士たちを結束させる機能を果たしていない。

逆説的ではあるが、『アーサー王の死』における字名としての地名は重要な要素となる。マロリーは円卓崩壊の悲劇を、血縁を体現するガウェインと友愛を重んじるランスロットの反目として描いた。その二項対立から外された地名が従来のアーサー王伝説でどのような役割を果たしていたのかを考察することは、新たなマロリー解釈に結び付くからである。

**15:00-17:20 研究発表Ⅱ** (10号館1階 X103教室)

**15:00-15:40 司会** 小塚良孝 (愛知教育大学)

## **5. 古英語から初期中英語における語順：動詞の意味・統語的特性から**

高橋佑宜 (京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

古英語・中英語における語順の研究は verb-second 語順の機能・衰退 (e.g. Los 2009), 主語・目的語を中心とした情報構造と語順の関係 (e.g. Pintzuk 2008) 等のトピックと並行して、動詞と語順の関わりといった観点からの研究も行われてきた (e.g. Kohonen 1978; Bech 2001, 2008; Kemenade 2012)。本発表は、先行研究の枠組みを補完し規模を拡大した上で、動詞の意味論・統語論的な特性に焦点を当てて語順について考察する。用例は York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose と Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English (2nd edition) から抽出したものを利用する。分析は主節において明示された主語を有する平叙文を対象とし、(1) 2種類の節 (non-conjunct/conjunct clauses), (2) 6種類の語順 ('unmarked' (SVX), verb-second (XVS), verb-medial (XSV), verb-late (SXVX), verb-final (SXV), verb-initial (V-init)), (3) 動詞の意味・統語的特性に基づく5種類の動詞区分 (Bech (2001, 2008) の拡張) という3つの次元から分類を行う。その結果、古英語から初期中英語における語順及びその変化には動詞の意味・統語的な特性が密接に関係していることを指摘する。また、同様の観点からテキスト間・ジャンル間の差異についても考察を試みる。

15:50-16:30 司会 小塚良孝 (愛知教育大学)

## 6. 古英語版『オロシウス』における主節の動詞文末語順の考察

小林茂之 (聖学院大学)

古英語は他のゲルマン諸語と同様に基本的にV2言語である。古英語の主節の典型的な語順はV2語順に従っている一方で、動詞文末語順の例が、特に初期の古英語散文に少なからず見られる。どうして古英語散文に動詞文末語順が存在するのかは、議論の余地がある。一つの仮説は、9世紀にアルフレッド王のサークルによってラテン文献の古英語への翻訳事業が行われたために、そのような語順はラテン語の影響から採り入れられたというものである。他の一つは、初期古英語、特にウェセックス方言は、内部的にそのような語順を発達させたというものである。当研究は、古英語版『オロシウス』について、ラテン語原文に存在しない *Ohthere* および *Wulfstan* による記事をラテン語原文に対応する部分と語順の観点から比較するとともに、後者をラテン語原文と比較することにより、古英語における動詞末尾語順へのラテン語の影響について検証する。

16:40-17:20 司会 小池剛史 (大東文化大学)

## 7. 古英語 *hātan* とその関連表現

海田皓介 (千葉大学非常勤講師)

現代英語で目的語と原形不定詞を取り、「使役」(「～に～をさせる」)を表す語彙には *LET* と *MAKE* があるが、古英語では現代英語で廃用となっている *HĀTAN* (「～に命じて～をさせる」) がよく見られる。*HĀTAN* はまた、'to call'(「～を～と名付ける、呼ぶ」)という語法(便宜上、「命名語法」と称する)がある。また古英語では *HĀTAN* に接頭辞 *GE-* の付加された *GEHĀTAN* も、*HĀTAN* のように2通りの語法で用いられる。こうした背景から、*HĀTAN* の語法研究では、(1) *(GE)HĀTAN* の命名語法と使役語法との分化、(2) *HĀTAN* と *GEHĀTAN* との相違、(3) *(GE)HĀTAN* の類義語(命名語法では *NAME*, *CLYPIAN*, 使役語法では *LET* など)との競合による英語史上での消失が要となる。近年 *The Dictionary of Old English* の *H* の項目が利用可能となり、*HĀTAN* について研究の幅は広がったと言える。本発表は、*The Dictionary of Old English, Web Corpus* 収録の用例に基づき、使役語法の *(GE)HĀTAN* が古英語にてどのように用いられるかを検討する。本研究が個別語彙についての研究成果を提供することで、体系的な語彙研究を発展させたい。

15:00-17:20 研究発表Ⅲ (10号館1階 X105教室)

15:00-15:40 司会 網代敦 (大東文化大学)

## 8. 古英詩 *Andreas* における街の風景

衛藤安治 (福島大学非常勤講師)

古英詩 *Andreas* の研究は *Beowulf* の「模倣」をめぐる議論が行われてきたが、Hamilton (1975) や Irving, Jr. (1983), あるいは Riedinger (1989, 1993) のあたりから模倣を所与の事実と見做し、模倣の「様相」に研究者の関心が向けられるようになってきた。この発表でも模倣を所与の事実として捉えることにする。

Riedinger (1989, p. 184) は「*Andreas* に見られる *Beowulf* 的な “Hall” のイメージは選択的に、特に改宗後の場面で用いられている」という趣旨の発言をしている。しかしながら、Riedinger (1989) は改宗前の風景描写についてはほとんど言及していない。この発表では、改宗後の風景だけでなく、一見自然の岩山のようにも見える、改宗前の「街の風景」についても考察し、両者を比較することによって風景の変容を明らかにする。その際、*Beowulf* の類似表現と比較しながら、この作品における「模倣の様相」を浮き彫りにし、詩人が独自の工夫を凝らしていることにも注目したい。

15:50-16:30 司会 中尾佳行 (福山大学)

## 9. John Lydgate の聖母関連詩と aureate style の同時代受容をめぐって

新居達也 (慶應義塾大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

ラテン語由来の語彙・統辞法を取り入れた文体、aureate style は、John Lydgate (c. 1370-1450) の作品、特に聖母崇拜を題材とした詩に多用されたことで知られ、近年の批評では Lydgate 作品の権威化の過程で aureate style が果たした役割が指摘されている。しかし、先行研究においては15世紀当時の aureate style の受容に関して十分な検証が為されているとは言えない。本発表は、aureate style を用いた Lydgate の聖母関連の短編詩、特に *Legend of Dan Joos* の受容を写本コンテクストの観点から分析することで、先行研究の不足を補填する試みである。

*Legend of Dan Joos* のテキストは Trinity College, Cambridge, MS R.3.21 と British Library, MS Harley 2251 の2写本に現存しており、それぞれの写本内

で並置された他作品との関係等から、この作品の同時代受容の背景に、聖母崇拜の言説と結び付けて aureate style を肯定的に評価する写字生や読者の態度が存在したことを推定できる。

加えて本発表では、これらの写本が流布したと考えられるロンドンの市民階層とテキストの関係性、及び Thomas Arundel による *Constitutions* (1407/09) の影響等、15世紀イングランドの俗語宗教文学をめぐる全体的な動向と Lydgate の aureate style に対する同時代の評価との相関についても検証したい。

16:40-17:20 司会 米村泰明 (埼玉学園大学)

## 10. ヨーク・サイクルにおけるイエスの裁判 — ピラトとヘロデによる「中世の」法廷 —

末松良道 (元武蔵野大学教授)

古代を扱った中世イングランドの文学作品は、それぞれのやり方で中世の文脈に合わせた「中世化」(medievalisation)がなされているのは言うまでもない。従って、チョーサーのアルシーテやトロイルスは、古代トロイア戦争の勇者というだけでなく、中世末期の騎士の要素も多々持っていて、そのような文脈で解釈がなされてきた。同様のことは聖書を基にした聖史劇についても言えるはずである。この発表ではサイクル劇の受難場面、特にヨーク・サイクルのピラトとヘロデの法廷を取り上げ、これらの裁判を描くにあたり、中世劇の作者たちが、どのように中世イングランドの裁判を念頭において劇を作っているかを検討する。劇の台詞やト書きを、中世の裁判に関する歴史研究、王座裁判所の写本画像、当時の裁判資料などと比較して、中世の裁判に基づいた描写がサイクル劇に描かれた裁判のリアリティーを高めていることを明らかにしたい。その際、劇のテキストとその作者達の視点だけでなく、当時のヨーク市などの観客が彼ら自身の生きた環境に引き寄せて受難劇を受容したであろうことも念頭に置いて議論したい。

## 第2日 12月3日(日)

10:00-13:00 企画シンポジウム (7号館1階7102教室)

### The Art of Reading Slowly — 中世英語テキストを精読する

司会 寺澤盾 (東京大学)

近年英語史研究では電子コーパスやインターネット上のリソースなどを援用し膨大なデータを分析する量的研究が盛んになり、多くの成果を上げている。文学研究においても、従来の<sup>キヤノン</sup>正典の精読 (close reading) に対して、文学作品をビックデータとして解析する「遠読 (distant reading)」が提案されている。本シンポジウムでは、こうした潮流にあえて抗して、伝統的なテキスト精読 — フィロロジカルな読み (the art of reading slowly) — を試み、精読の価値を再確認したい。各講師には中世英語テキストにおける語学上難解な箇所 (crux) と格闘していただき、こうしたフィロロジエの実践を通して、(多くの刊本・注釈が出ている) 正典と呼ばれる作品においてさえも、まだまだ多くの未解決なテキスト上の問題が存在していることを示していきたい。

さらに、昨今英語英文学研究においては、語学と文学が乖離する傾向が見られるが、テキストのフィロロジカルな読みが作品の文学的解釈に関してもあらたな知見を与えうることを提示できればと思う。

10:10-10:40

#### I. 十字架はキリストを殺したのか

##### — *The Dream of the Rood* 66a 再考

寺澤盾 (東京大学)

*The Dream of the Rood* は Vercelli 写本に収められている156行からなるキリスト教詩であるが、詩人の夢に現れた十字架がイエス・キリストの受難を語るという形式をとっている。キリストの死後ヨセフなどが亡骸を埋葬するため墓を建てる様子を十字架が語る箇所に、on banan gesyhðe (「人殺しの見ている前で」66) という表現が用いられている。最初期の刊本の編者である Albert S. Cook は単数属格の banan (人殺し) を複数属格 banena に校訂し、キリストの処刑に関わった人々を指していると考え (ただし処刑者たちが埋葬の場面に居合わせていたという記述は見られない)。一方、bana が「刀」のような殺害の手段に対して使われている例が *Beowulf* に見られることから、banan はキリ



ストの処刑に用いられた「十字架」を指しているとする解釈が、近年では大方の支持を得ている。しかし、*The Dream of the Rood*では十字架は釘で打たれ血で染まり、キリストと一心同体の存在として描かれており、この箇所において十字架をキリスト処刑の加害者側の存在と見なすのはやや唐突な感がある。本発表では、*banan*について再考し新たな解釈の可能性を探ってみたい。

10:40-11:10

## Ⅱ. 校訂本作成を支えるフィロロジ — 古英詩 *Menologium* と *Maxims I* の場合

唐澤一友 (駒澤大学)

中世英文学作品の校訂本作成の作業は、フィロロジの一つの出発点であり終着点でもあるように思われる。そこで、本発表では、発表者本人が校訂本作成の作業を通じて体験した「ゆっくり読む技術」の可能性について論じたい。本発表では、特に古英詩 *Menologium* の中におけるこれまで未解決だった問題について、ひたすらゆっくり (繰り返し) 読んだ結果、合理的な答えが見えて来た例を具体的にいくつか紹介したい (特に64b, 70b, 164a, 181b, 184b, 206a の問題を中心に扱う)。しかし、いつも良い結果が出るとは限らず、いくら時間をかけて読んでみても、なかなか答えが出ない難しい問題があるのもまた事実である。そのような問題の一例として、本発表では、*Maxims I* 66a に見られる例を紹介しつつ、可能であれば、この種の難題に向き合うための知恵を他のパネリストあるいはフロアーからお借りしたい。

11:20-11:50

## Ⅲ. 精読から引き出される中英語の言語的特徴

三浦あゆみ (大阪大学)

フィロロジストでなくとも、古・中英語の語学的研究におけるテキスト精読の重要性は現在でも否定できないだろう。一部のコーパス言語学者の間でも、用例の緻密かつ包括的な分析が可能なことなどから、大規模コーパスに対する小規模コーパスの利点が見直されている (Hundt & Leech 2012)。

語学的に正確な読みを疎かにすると、当時の言語的特徴を読み誤ることになる。たとえば、原典など作品の背景も考慮することで、Bergh & Seppänen (2000) で引用されている関係詞 *that* の *pied piping* の例を、中英語期において同構造が可能だったことの根拠とするのは危ういことが分かる。一方で、コー

パスを利用せず、特定作品の精読だけでは、生起頻度など当該用法の共時・通時的位置づけは得られない。

本発表では、中英語作品のエディションとアンソロジーにおける本文校訂や注釈の妥当性を検証することで、中英語の特定の用法についてどのような結論を引き出せるか、複数の事例を示す。Lass (2004) や Marqués-Aguado (2013) で指摘されているような、エディションを言語研究に用いることの危険性についても併せて考察したい。

11:50-12:20

#### IV. *The Canterbury Tales: General Prologue*, line 521と *Piers Plowman* B. V. 187の解釈をめぐって

田島松二 (九州大学名誉教授)

語義や文法にこだわりながら、厳密にテキストを読もうとすると、意味不明の箇所や、従来の解釈、説明等に納得のゆかない箇所にしばしば遭遇する。すぐれた刊本、研究書、註釈・解説書、グロッサリー、現代語訳等が数多く利用できる作品も例外ではない。しかも、テキストを訓詁学的に読まざるを得ないわれわれ日本人は、欧米人には何でもないところで、つまずき、難渋する。そのような箇所を、中世英文学を代表するチョーサーの *The Canterbury Tales: General Prologue* (line 521) と、チョーサーと並び称されるラングランドの *Piers Plowman* (B-text, V. 187) から取り上げ、テキストを精読する、つまり語学的に厳密にテキストを読むとはどういうことかを考えてみたいと思う。

10:00-12:20 研究発表IV (10号館1階 X102教室)

10:00-10:40 司会 石黒太郎 (明治大学)

#### 11. 中世イングランドの百科事典と編纂者たち — アレクサンダー・ネッカムとバルトロマエウス・アングリクスを中心に

大沼由布 (同志社大学)

いわゆる「百科事典」と呼ばれる書物には、プリニウス (1世紀)、ソリヌス (3世紀)、セビリアのイシドールス (6~7世紀) 等の系譜があり、その延長線上に12~13世紀の百科事典の隆盛が訪れる。その代表として、イングランドでは、アレクサンダー・ネッカムの *De naturis rerum* (『事物の本性について』, 12世紀後半) 及びバルトロマエウス・アングリクスの *De proprietatibus rerum*

(『事物の属性について』, 1245年頃) が挙げられる。百科事典の記述は、一見大きな違いはないが、情報の切り取り方、構成や並べ方、記述や分類の仕方等の編纂方法により、情報の見せ方や印象の与え方を変えることができ、そこに、それぞれの編纂者の意図が読み取れる。本発表では、序文、構成、実際の記述等を通して、この二作品の編纂方法を、中世百科事典の頂点ともいべきヴァンサン・ド・ボーヴェの *Speculum maius* (『大いなる鏡』, 1244-60年頃) 等、他の百科事典と比較しつつ分析する。それによって、百科事典の発展と編纂者との関わりや、イングランド出身の上記二人がそこで果たした役割について考えたい。

10:50-11:30 司会 岡本広毅 (立命館大学)

## 12. *Paris and Vienne: William Caxton's Romance or History?*

Wanchen Tai (慶應義塾大学・一橋大学非常勤講師)

William Caxton is noted for his caution toward romance. He translated and printed historical prose romances rather than popular verse versions, as the latter fell out of fashion and readers began to prefer material that was reasonable and tolerably credible at the end of the Middle Ages. The permeable boundary between history and romance led him to make a demarcation that was necessary to save his “history” from becoming “romance,” a genre stigmatized for its common origin and popular taste. Caxton’s prologues and epilogues reflect this anxiety and consciously embody his intention to provide reading guidelines. The text of *Paris and Vienne* (hereafter *P&V*), however, seems to be devoid of such a didactic context. It stands alone, with only a brief epilogue providing factual information about the translator-publisher-printer and the dates of completion and publication. The story of *P&V* is hardly innovative, and it is rarely discussed among Caxton’s other publications. This paper aims to explore the ways in which *P&V* can be located in the distinction between the two types of writing made by Caxton to characterize his works. (This paper is to be presented in English.)

11:40-12:20 司会 都地沙央里（福岡女子大学）

### 13. ウィリアム・キャクストンの印刷用手稿に見るテキスト改変

高木眞佐子（杏林大学）

現在キャクストンが使用した二つの印刷用手稿が知られている。Lorenzo Traversagni (Laurentius Traversanus) によりラテン語で書かれ1478-79年に印刷された、作者自身の手による *Margarita eloquentiae, or Nova Rhetorica*。そして英語版 *Prose Brut* を底本としつつ、キャクストンによる独自の付け足しがなされた1480年の *Chronicles of England* の印刷用手稿である。1478年から1480年は、ウェストミンスター工房に腰を落ち着けたキャクストンがヨーク宮廷の庇護の下で印刷活動をしていた時期に当たり、活字の改良をはじめ多くの工程刷新がもたらされた時期でもある。英語で書かれた *Chronicles of England* の印刷用手稿は、①キャクストン工房における印刷工程、②英語のスペリングと語法の近代化に向けた動き、そして③キャクストンによるテキスト編纂の問題について、それぞれ重要な証拠を内包している。本発表では、発表者が手稿と印刷本を比較することによって得たデータに基づいて、キャクストンの本文校訂のプロセスを明らかにするとともに、これまでキャクストンの印刷用原稿に対して投げかけられてきた疑問や推測を部分的にでも解明することを目標とする。

10:00-12:20 研究発表V（10号館1階 X103教室）

10:00-10:40 司会 鎌田幸雄（仙台大学）

### 14. 14世紀頭韻詩韻律研究の現況と展望

—『ガウェイン』詩人の作品を中心に—

井上典子（小樽商科大学）

14世紀は2つの伝統的な詩形、脚韻詩と頭韻詩が共存し、互いに影響を与え合いながら変容を遂げていった時代である。長年、14世紀の頭韻詩群に「韻律規則」(‘metrical rules’) と呼ぶことのできるようなリズムと頭韻の規制が存在するとは考えられてこなかった。しかし1990年前後に Hoyt Duggan および Thomas Cable が、非脚韻頭韻長行の後半行を支配するいくつかの韻律規制を発見すると、韻律研究は飛躍的に加速し、現在では、頭韻詩人たちが、実はチャオサーと同様、厳しい韻律規則の下で詩作をしていたことが分かってきている。

発表者は、頭韻詩群の韻律構造および脚韻詩人と頭韻詩人たちが、それぞれの韻律条件を満たすために活用する共通の詩的技巧や工夫などを調査してきたが、今回の発表では、頭韻詩韻律研究における現在までの成果を『ガウエイン』詩人の作品を例に整理していきたい。具体的には、まず韻律構造の解明がかなり進んでいる後半行に関する主要なルールを考察した後、より複雑な韻律構造を持つ前半行に関する主要な争点と見解を検証する。このような整理をした上で、今後の頭韻詩研究の展望と可能性をより明確にすることが目標である。

10:50-11:30 司会 堀田隆一（慶應義塾大学）

## 15. サミュエルズ タイプⅡの4つの文書

松沢絵里（大阪芸術大学）

Samuels (1963) は、14世紀のロンドン英語を4つのタイプに分けた。

タイプⅠ：ウィクリフ派の英語

タイプⅡ：初期のロンドン英語

タイプⅢ：チャーサータイプ

タイプⅣ：ウエストミンスタータイプ

このうち、15世紀初期に書き言葉標準語となるものは14世紀後期のタイプⅣのウエストミンスタータイプである。Hanna (2005) は、10の文書を初期のロンドン英語であるタイプⅡとして挙げている。この中には、英語による最も古い公文書の『オックスフォード条項』、脚韻詩 *Kyng Alisaunder* (KA) AテキストとBテキスト、同じ作者とされる *Of Arthur and Merlin* (AM) 等が含まれており、KA-AとAMはオーヒンレック写本に含まれている。但し、KA-Aは410行しか現存していない。KA-BとAMはほぼ完全な形で現存する。本発表では韻文であるKAおよびAMの脚韻語の推定から得られた14世紀初期ロンドン英語に存在するOE æ1.2から発達した低母音 /a:/ が、法律文書として書かれた『オックスフォード条項』の英語ではどのように使用されているかを比較、確認する。

11:40-12:20 司会 井口篤（慶應義塾大学）

## 16. 中英語散文 *Gilte Legende* の言語的特徴

池上恵子（成城大学短期大学部名誉教授・前大東文化大学教授）

ラテン語で書かれた *Legenda aurea* の中世フランス語訳 *Légende dorée* を自称 'sinful of wretch' が1438年に中英語散文に翻訳したと推定される *Gilte*

*Legende (GiL)* が、韻文の *South English Legendary* と入れ替わるように中世イギリスの聖者伝集として広く流布したことは、ほぼ完全な現存写本 8 点ほかから推定される。本来キリスト教布教文書であるが、15 世紀半ば、階層に限定はあるがすでに市民階級にも拡大していた英語散文を読む力を背景として、好まれて読まれたと推定できる。本発表では、*GiL* の 179 章（1 章重複を省き 178 章）すべてについて中英語に訳す際に翻訳者が加えた加筆修正を精査する。当時の読者の言語に相応しく、読み易くしたと判断できる箇所は何を示唆するか、OF 系語彙の定着度も加えて、散文訳の聖者伝がどのような読み物として扱われたのか検討する。

# アーサー王伝説 – 19世紀初期物語集成 –

*The Morte Darthur: A Collection of Early-Nineteenth-Century Editions*

全7巻+別冊日本語解説 ● 監修・解説：不破有理（慶應義塾大学教授）

◆◆◆◆ 構想10年・ついに刊行！

2017年3月刊 / B6 & B5判 / 約3,250頁 / 本体価 ¥168,000- (+税) ISBN 978-4-902454-41-3

19世紀初頭に英国で出版され、ロマン派時代からヴィクトリア朝の中世主義の流れを決定づけた『アーサー王の死』の3種の版を復刻。監修者による詳細な書誌解題（英文&和文）付き。

第1-2巻：*THE HISTORY OF THE RENOWNED PRINCE ARTHUR, KING OF BRITAIN...*,  
Printed for Walker and Edwards, 1816.

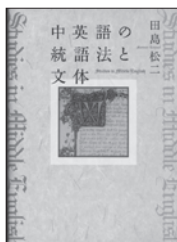
第3-5巻：*LA MORT D'ARTHUR. ....*, Printed & Published by R. Wilks, 1816

第6-7巻：*THE BYRTH, LYF, AND ACTES OF KYNG ARTHUR; ....*,  
Printed from Caxton's Edition, 1485, for Longman, 1817.



Eureka Press c/o Edition Synapse 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-5

Tel: 03(5296)9186 Fax: 03(3252)1822 <http://www.aplink.co.jp/synapse> 【カタログ呈】



## 中英語の統語法と文体

田島 松二著

A5判 296頁

定価 (本体 4,600円+税)

ISBN 978-4-523-30076-2

鬱蒼たる中世英語の森探索の比類なき道しるべ！

## ことばの楽しみ

—東西の文化を越えて

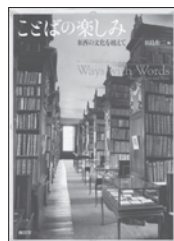
田島 松二編

A5判上製 函入 434頁

定価 (本体 8,000円+税)

ISBN 978-4-523-30072-4

ことばをこよなく愛し研究しつづけてきた成果を収めた  
示唆にとむ刺激的論文とエッセイ！



南雲堂

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 361

E-mail : [nanundo@post.email.ne.jp](mailto:nanundo@post.email.ne.jp)

TEL : 03-3268-2311

いよいよ最終年 お申込み期限:2018年3月末まで

JUSTICE コンソーシアム採択商品

FTEは問いません。コンソーシアム価格はお問合せください。

JUSTICE コンソーシアムに採択されたことにより大幅な割引率でご購入いただけます。

無料  
トライアル  
受付中

## 18世紀英国・英語圏刊行物集成

*Eighteenth Century Collections Online (ECCO)*

EEBOに続く時代の英国・英語文献3,300万頁をフルテキスト検索!

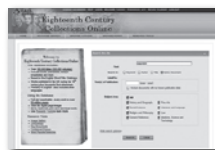
- ◆ 原本所蔵機関：大英図書館、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ハーバード大学、スコットランド図書館、米国議会図書館、ハンティントン図書館、マンチェスター大学 他
- ◆ 収容資料数：20万巻 ◆ 総頁数：3,300万頁

全文検索で新たな発見・  
思わぬ発見!  
研究のスピードが変わる

英語圏の印刷物を網羅、あらゆる分野・形態のものを収録

EEBO(Early English Books Online)とECCOをそろえることで歴史的な英語文献を網羅するコレクションが完成します。両データベースは横断検索が可能です。

[Cengage Learning / 日本総代理店]



**M MARUZEN-YUSHODO** 丸善雄松堂株式会社

学術情報ソリューション事業部 サブジェクト推進部 <http://yushodo.maruzen.co.jp/>

〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町10-10 Tel: 03-3357-1415 Fax: 03-3356-8730 e-mail: [academicinfo@maruzen.co.jp](mailto:academicinfo@maruzen.co.jp)





